自然と数学のロマンの物語
——小川洋子「数の不思議に魅せられて」

黒田　苑
須貝航太

1　はじめに

小川洋子「数の不思議に魅せられて」（『犬のしっぽを撫でながら』集英社二〇〇六・四、集英社文庫二〇〇九・一、底本は『新編国語総合』第一学習社二〇一二・二）は、秩序の中に埋め込まれた美しい数学を日常生活と関連づけ、物語の世界で描くと現実さえもロマンチックにするのであり、数学の定理は数学者の醍醐味とは自然を秩序で表現するのに対し、人間の有限性は数の永遠性に及ばないが、人間は現実を物語に変えることで有限性を受け入れることができるというエッセイである。

エッセイは柔軟な思考を叙述していくゆえに、時に矛盾を伴いながら主張・感慨が示される。本稿では、エッセイの矛盾点と論理の飛躍、エッセイの物語的側面を検討する。

2　数学の引用法

「数の不思議に魅せられて」には『博士の愛した数式』の自作自解が示される。

『博士の愛した数式』は数学者が主人公です。あるいは、数そのものが主人公といってもいいかもしれません。数の世界を物語の形で、表現したいという願いを持って書いた作品です。

「私」は、数学の秩序が自然の秩序よりも美しく構成されていると捉える。ここでの自然は、人間の人生も含まれるが、友愛と友愛数、完全数と「（完全な）野球選手」を例に数学と自然の照合を行う。

「友愛」という言葉がとても魅力的です。味気ないと決めつけていた数学の世界に、ロマンを見つけたような気分でした。それまで何の意味も持たなかった二つの数字、220と284が握手をし、肩を抱き合っているような、血の通った数字に見えてきたのです。

「友愛数」の中に「友愛」を見出したという引用部分は、数字を「握手」「肩を抱き合う」「血の通った」といったレトリックによって擬人化している。修辞によって作られた秩序は字義的な世界の秩序とは対応しつつ異なる。「友愛数」の中に人間の「友愛」の感情を見出すことは数学の秩序を変質させる。ゆえに、永遠性や秩序を保持した「数の世界を物語という形で表現する」ことは達成されない。

『博士の愛した数式』でも家政婦は友愛数によって博士と友愛の関係であるような描写が随所にある。たとえば、家政婦の誕生日の二月二十日、すなわち220と学長賞のナンバー284について博士は次のように語る。

「見てご覧、この素晴らしい一続きの数字連なりを。220の約数の和は284。284の約数の和は220。友愛数だ。めったに存在しない組み合せだよ。（略）神の計らいを受けた絆で結ばれ合った数字なんだ。美しいと思わないかい？君の誕生日と僕の手首に刻まれた数字が、これほど見事なチェーンでつながり合っているなんて」

ここでは、博士は数字でつながった家政婦との特別な関係に感動しているかのようである。しかし、後に、「何を喋っていいか混乱した時、言葉の代わりに数字を持ち出すのが博士の癖」であり、「他人と交流するために彼が編み出した方法」であることが判明する。博士にとって、220と284の友愛数の話は、何気ない会話の一つであり、家政婦が感じているほど重要な意味を持っているわけではない。

また、阪神の観戦後に熱をだして倒れた博士の介抱をしている場面でも、博士に誕生日を問われた家政婦は、「二月二十日です」、「220です。284と友愛の契りを結んだ、220です」と、自分たちがまるで特別な関係であるかのような口調で語る。しかし、実際には、博士と彼のために雇われている家政婦でしかない。

家政婦は、博士とともに過ごした記憶が自身の中に存在するため、博士に対して友愛の関係を感じられる。しかし、博士は、記憶が八十分しか持たないため、家政婦のことを覚えておらず、友愛も感じていない。しかし、家政婦との記憶がない博士にとって、家政婦が話す言葉は否定できない命題であり、家政婦の言葉から友愛が触発されて生じたとも考えられる。それは、家政婦（＝語り手）のバイアスによってロマンチックな関係に仕立て上げられているのであり、エッセイで言う「ロマン」は博士と家政婦の関係を指示するわけでもない。

清水良典氏は、『博士の愛した数式』における数字を、次のように分析している。

つまりこの小説において数学的なボキャブラリーは、ほとんど小説的な感情移入の表現や人間関係の描写の隠喩として立ち現れるのである。この法則が理解できたとき、本書に充満する数学的な説明は、すべての物語の主要な情報として理解しうることになる。数学のロマンティシズムが、本書においては、物語の重要な構築要素となる。[1]

確かに友愛数をはじめとした数学的なボキャブラリーは、その存在が、物語の主要な構成要素である。しかし、先述したように、この数学的ボキャブラリーが人間関係の描写を陰喩しているわけではないのである。

3　結論と論拠のつながり

エッセイでは最後に次のように述べられている。

人はただ、目に見える、手で触れる現実の世界のみに生きているわけではありません。人は現実を物語に変えることで、死の恐怖を受け入れ、つらい記憶を消化していくのです。人間は誰でも物語なくして生きてはゆけない、私はそう思います。

傍線部は「数の不思議に魅せられて」のキー・センテンスである。ここでの「物語」は「死の恐怖」と「つらい記憶」を乗り越えて生きていくための装置とされる。とすれば、『博士の愛した数式』では「死の恐怖」と「つらい記憶」が消化されていただろうか。

毎朝、目が覚めて服を着るたび、博士は自分が罹っている病を、自らが書いたメモによって宣告される。さっき見た夢は、昨夜じゃなく、遠い昔、自分が記憶できる最後の夜に見た夢なのだと気付かされる。昨日の自分は時間の淵に墜落し、もう二度と取り返せないと知り、打ちひしがれる。ファールボールからルートを守ってくれた博士は、彼自身の中では既に死者となっている。毎日毎日、たった一人のベッドの上で、彼がこんな残酷な宣告を受け続けていた事実に、私は一度も思いを馳せたことがなかった。

引用部分では、語り手の家政婦が博士の立場に寄って考え、博士の日常の残酷さに思いを馳せる。家政婦が知る限りの博士を再現して考えるだけでも重い事実であろう。また、語り手の家政婦も幼少期から家庭が不安定であったことやルートの父親について思うことがある。

原氏は次のように述べている。

自身の記憶の非持続性との苦悩とは別に、あるいはそれがさらに増幅させるような形で、義姉との今となっては不可能な愛の苦悩を博士は繰り返すのである。母屋の老婦人が禁断の愛の相手である義姉だと認知することにより、過去の最愛の義姉の記憶と眼前の老婦人とのギャップ、それ以上に（交通事故時に同乗しているような）愛の至福の時から突然の老耄の今に突き落とされ、愛の不可能性を思い知らされる、謂わば玉手箱体験とも言うべきものを毎朝博士は繰り返しているはずである。[2]

『博士の愛した数式』では、「死の恐怖」と「つらい記憶」と物語の効用の関係で考えると、交通事故、博士と未亡人との記憶について直接語られることはない。

このため、引用部分では論述の飛躍が生じている。もっとも、間接的に考えさせることが物語の効用であるが、『博士の愛した数式』では物語によって「死の恐怖」と「つらい記憶」が乗り越えられていると直接的には示されていない。

4　エッセイの物語的側面

小川洋子『博士の本棚』（新潮社　二〇〇七・七、新潮文庫二〇一〇・一）に収録されたエッセイ「三角形の内角の和は」は、「数の不思議に魅せられて」になかった考えが示されている。

「三角形の内角の和は180度である」と、つぶやいてみる。つくづく偉大な一行だと思う。どんなにすぐれた文学作品でも、これに勝る一行は表現できないだろう。（略）「自分が死んだあともずっと、三角形の内角の和は180度であり続ける」真夜中の小さな書斎で書かれた小説が朽ち果て、すべての人々の記憶から消え去ってもなお、作家が口にした定理は真実として残る。

ここでは、物語と数学が対称的に述べられている。物語は付加価値によりその存在が意味づけられる一方、数学は定理によって絶対的な価値が与えられる。

小川は物語や作品についてよくエッセイにする。エッセイは日常を感覚的に語るように、論拠が自身の経験であることが多い。しかし、小川のエッセイの特徴は物語や作品について語るように論拠が自身の作り話である。つまり、現実的でないこと、空想的なことを思うがまま執筆している。これが、彼女の論理展開を奇妙なものにしている。

さらに、ロマンが前の問題に拍車をかける。「数の不思議に魅せられて」は数学のロマンについて度々ふれる。

エッセイは、数学の秩序の世界を現実と関連づけた際の感動を呼び起こす流れをとっている。この文脈において、数式と作品（『博士の愛した数式』）の説明は必須の要素である。したがっ

表「数の不思議に魅せられて」の段落構造[3]

段落	頁・行	話題	内容
1	79・1－3	物語	『博士の愛した数式』の作品紹介
2	同・4－7		問題提起（どのように作品が生まれたか）
3	同・8		
4	同・9－11	数	友愛数との出会い
5	同・12－80・5		友愛数の説明
6	80・6		友愛数に感じるロマン
7	同・15－81・2	物語	友愛数の発見（主人公と博士）
8	81・3－5		友愛数から浮かぶ場面
9	同・6－8		友愛が導く関係性
10	同・9－10		話題転換（主人公の息子と博士）
11	同・11－14		野球選手と完全数
12	同・15－17	数	完全数の説明
13	83・1		完全数の具体例
14	同・3－4	物語	完全数と江夏豊の偉大さ
15	同・5－6	数	ピュタゴラスの定理について
16	同・7		定理と暗記
17	同・8－10		定理の永遠性
18	同・11－12		定理を暗記事項から捉え直す
19	同・13－16		定理における美しさ
20	同・17－84・2		三角形の内角の和の秩序の美しさ
21	84・3－7	数	数学の定理と俳句
22	同・8－11	結論	数の永遠性と人間の有限性の比較
23	同・12－14		有限の人間に対する愛おしさ
24	同・15－17		人生における物語の必要性

て、物語についての記述と数学についての記述が交互に展開される。

表で、ロマンが語られている段落を網掛けにする。そうすると、結論より前の部分において、数式の説明の部分以外は網掛けとなる。エッセイではどのように作品が生まれたかという問題提起から、数式の説明が因果関係の原因を示し、物語の説明が結果を示すことになる。つまり、論拠となる結果の部分では「私」のロマンでまとめられている。

ロマンとは、現実となっていない「私」の願望あるいは想像の産物である。すなわち、「数の不思議に魅せられて」は、フィクショナルな要素と相まって物語のような語りがされている。

5　まとめ

問題提起と結論は呼応関係になければ意味不明となる。「数の不思議に魅せられて」ではどのように作品が生まれたかという問題提起に対し、このように生まれたことを明確に述べて意味が通るはずである。しかし、段落構造の分析が示すように、本エッセイの結論は問題提起の回答ではなく、有限な人生にお

ける物語の必要性である。

では、問題提起の答えはどこに述べられているのか。それは数式の説明の具体例として扱われている。あるいは第14段落までで既に結論は出ているという見方もできなくはない。しかし、いずれにしても文章として問題提起とその答えが明確でなく、第22段落以降が結論なのか、それとも提言なのかは定かではない。これは、エッセイのタイトルが「数の不思議に魅せられて」であることからも言える。そこから有限な人生における物語の必要性を見出すのは、論理が飛躍しすぎていて困難なのである。

註

(1) 「『博士の愛した数式』―神の手帳に記されていること」(『現代女性作家読本②小川洋子』鼎書房二〇〇五・一一) 一二九頁。

(2) 「博士の愛した数式／数式に埋もれた愛」(『現代女性作家読本②小川洋子』) 一三五頁。

(3) 頁・行は底本による。なお、83・6、同・12、同・17の定理の定義部分は前後の段落と一つにまとめた。

(くろだ・えん　富山大学生)
(すがい・こうた　富山大学生)